

日本キリスト教会大阪北教

2017年10月15日(日)聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 エフェソの信徒への手紙6章1節～4節

「06:01 子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。06:02『父と母を敬いなさい。』これは約束を伴う最初の掟です。06:03『そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる』という約束です。06:04 父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。」

<説教> 「キリストに従い、両親に従いなさい」

◆前回からパウロの勧告の言葉を読んでおります。「妻と夫」、「親と子」、「奴隷と主人」そして、4つ目の勧告の小見出しは「悪と戦え」となっていますが、これは『教会と国家』に関わる勧告であります。いずれにしても、人それぞれで、聖書の時代も古いわけですから、今の自分の立場に直接的にぴったりと行かない勧めもありますが、これらの勧告を通し、聖書の御言葉を通して、今・此処に生きる私への勧めの言葉を、主の御言葉を懸命に聞かねばなりません。

◆ところで今、22日の投票日に向かって衆院選が行われています。世界の情勢が落ち着かない中での大事な選挙であります。このような状況において、教会は何を人々に伝えて行くべきかと思えます。それで、今日も礼拝の招詞として詩編117篇の御言葉を聞きました。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまことは永久にわたしたちを超えて、私たちの上に、力強い。ハレルヤ。」ハレルヤ！は、ヤハウエをたたえよ！主をたたえよ！の意味ですね。この詩編150篇中で最小の117篇の包括性と力強さは抜群であります。

◆教会が、いつの時代にも、今日の状況においても、この世に訴えるべき言葉として、これ程のものはないのではないのでしょうか。この詩編を、私たちの、教会の讚美、感謝、祈りとして、そして信仰告白としてしん、この世に証する事ができる時、私たちの教会は、正に「世のための教会」でもあるのであります。全ての国々と、全ての人々に、神様の慈しみと真実とが及んでいて、絶えることがないことを、福音として伝えて行きたいと思えます。

◆さて、今日の聖書箇所勧告は「親と子」に対するものであります。ところで、世に子でない人は、一人もありませんが、親でない人はいくらかおられます。今日の勧告をしておりますパウロの場合でも、彼も「人の子」ではあります、親では

ありません。生涯独身でした。だけれども、彼は伝道者です。そして、一人の人が導かれて、信仰者としてなるプロセスを「生みの苦しみ」に例えております。そして生み出された信仰者を「我が子」と呼んでおります。ですから、「肉の親」でないクリスチャンも全部、親の気持ち、子を思う親の気持ちはよく分るのですね。一人の人が、色んな経験を経て、一人の信仰者として生まれてくるのは、仲立ちをしてくれた人もあるでしょうが、本当に神様御自身が、イエス様御自身が、正に生みの苦しみをして、朽ちない命に、産み落として下さるのですね。

◆私は感謝すべきことには両親への恨みは全くありません。むしろ感謝しています。いずれにしても、両親がいてくれて、私がこの世に生まれなければ、イエス様に捕えられ、神様の恵みを知るということはなかったわけです。このような比べるべきものない恵みに与るチャンスをやはり両親が作ってくれたのです。そういう意味で、両親なしにこの幸いに与かる事は決してなかったのです。ですから、両親に対する感謝の思いはつるばかりです。

◆今日の聖書箇所は短いのですが、1節に、「子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。」とあります。この「主に結ばれている者として」は、直訳すれば、『主にあって』であります。つまり、「主に結ばれた者として」「主イエスのお陰で」と訳してもよいのです。私たちは「天的な、不滅の祝福、遺産」の相続人にされているのです。これが最初に確認すべきことです。これは、まさしく、両親あっての事であります。4節では、パウロは父親たちにこう勧めております。「父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。」主イエス様が私達に関わって下さる有り様こそは、親が子に対する姿勢として身に着けるべき、子育ての有り様だと言っているわけであります。

◆ところで使徒パウロは一連の勧告の冒頭で、このように勧めておりました。5章21節です。「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい」と。この一言の勧めで、ありとあらゆる場合における、時代における、ありとあらゆる立場にある全ての人への勧めは尽きております。「キリストに対する畏れをもって、互いに仕え合いなさい。」『仕える』という言葉は、「人の下に身を置く」というのが原意ですと、その時に申し上げました。高みから偉そうにものを言わない。本当に、誰に対しても、身を低くして、誠心誠意仕える。この一事を弁えておれば、後は、その時々状況に応じて、あれを言い、これをして過つことは決してありません。ですから今日の箇所における親と子に対する勧めも「主にあって」、「主が為さったように」あれというのが、今日の箇所のはじめと終わりにある言葉であります。

◆いずれにせよ、私達各自が今日あるのは、今日までの諸経験の集積です。それを一言表現するのは至難ですが、本エフェソ書の差出人である使徒パウロは、コリント前書15章10節でこのように言っております。「15:10 神の恵みによって今日のわたしがあつたのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」神様は、その恵みをもって、この世で「最も小さい者」を「最もよく働く者」に変え給うたのです。

◆親子関係が良い時はさして問題がないと思いますが、こんな言葉を昔聞いた覚えがあります。「生むつもりがなかったのに、生まれた子なの。」こんなことを親が思っているのを知ったら、子供は生きる気力を失いますね。口が裂けても言つてはダメですね。また、子供は子供で生きるのが辛いと、こんなことを言つてしまいます。「誰が生んでくれと頼んだ。勝手に生みやがつて。」いずれにせよこのような言葉は聞くのは辛いですね。

◆私に月に2～3回メールをくれる若い人がいます。最近届いたメールにはこうありました。「僕は、中学時代、4人から恐喝を受けました。あれから20数年。僕は、精神科に通い、障害年金を受けて暮らしています。同級生に会つて『青春を返せ!』と言いたいです」と。彼に先日、『ザアカイ物語』をメールに添付して送りました。『ザアカイ物語』はルカ福音書19章1節～10節に記されています。皆さんよく知つておられる話です。「ザアカイ」という名は正式には「ゼカリヤ」というのですが、「ヤハウエ覚え給う」という素晴らしい名前です。イスラエルに多い名前です。今日も日曜学校で、久しぶりに紙芝居を使つて話しました。先週の炊き出し祈禱会の時にも読みました。

◆わたしはこのザアカイ物語の凄さを再認識しました。それは福岡悠紀子姉妹を主の御許に送つた経験から光を与えられました。ザアカイはエリコの街の徴税人の頭で金持ちでしたが、町中の人々から総スカンを食つているわけです。心許せる友人が一人もないのです。そんなある日の事、イエス様がエリコに来られたのです。彼は予てよりイエス様を一目見たいと願つていましたが、エリコの人々に邪魔されて見る事ができません。そこで彼は、先の方に走つて行つて街路樹のいちじく桑のきに昇つて、イエス様を待ちます。すると、何と、イエス様はその街路樹の下で足を止められ、彼を見上げて、「ザアカイさん! 急いでおりて来て下さい。今晚あ

なたの家に泊めてください」と言われたのです。それで彼はビックリし、急いでおりて、イエス様をお迎えしたという話です。この日、ザアカイは生まれて初めて、ザアカイという自分の名をわが事として受け止めたと思います。

◆それで、このザアカイ物語と悠紀子姉がどう結び付くかということですが、私たちは、『主の祈り』によって、「御心の天になる如く、地にも成させ給え」と、毎日、毎夜お祈りいたします。この私たちの祈り、願いを、神様は、イエス様は聞いて下さるのです。ザアカイは、予てからこの目でイエス様を一目見たいと思い続けていたのです。それがこの日適ったのです。そして、この祈りをイエス様は、この悠紀子姉の祈りを、私たちの祈りを、イエス様は、あの最後の日に叶えて下さいました。それを、私はこの目で見ました。

◆それで、この悠紀子姉に起こった事と、ザアカイに起こった事と、アブラハムのイサク奉獻の際に起こった事と、モーセが主の召命を受けた時に起こった事と、使徒パウロに起こった事とは全く同レベルの恵みの奇跡だと思ったのです。わたしたちは、アブラハムやモーセや、パウロやザアカイと言え、聖書中の人物として、少し別格にしているませんか。しかし、私は今回、悠紀子姉妹を通して、この私たちの「御心の天になる如く、地にも成させ給え」との祈りを、神様は、イエス様は聞いて下さって、時満ちた時に、この祈りを成就して下さるのだとの確信を与えられました。私は今回、神様の恵みの証人としては、悠紀子さんも、アブラハムも、モーセも、ザアカイも、パウロも、そして私たちも、神様の恵みの証人としては、全く同レベルだという事に気が付きました。主は、覚えていて下さるのです。この聖書が証ししてくる事を、私たちは回復しなければいけないのです。

◆ところで、今日の聖書箇所20節にこうあります。「『父と母を敬いなさい。』これは約束を伴う最初の掟です。」これは当然、十戒の第5戒のことを言っているのです。出エジプト記20章12節にこうあります。「20:12 あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」と。出エジプト記19章20章を精読してください。厳粛で、荘厳で、感謝に溢れた讚美の思いが溢れています。十戒を賜るイスラエルの民の、真実な、心底からの「アーメン」と唱えて、十戒一つ一つを賜っている姿が、浮かび上がって来ます。エジプトの奴隷状態にあって、どうにもならない状態から、神様はイスラエルを解放されたのです。その神様の有難い御言葉です。十戒は彼らを守り、支え、解放す

る神様の御言葉なのです。

◆従って、何と云っても、先に生まれ、先にこの恵みを経験した者の務めは、先にこの恵みに与った親の使命、父、母の使命は、神様の恵みを生きて、それを子達に伝え、継承することです。霊的祝福の継承、信仰の継承です。他のことは、この中に全部込められています。今日の聖書箇所3節にこうあります。「『そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる』という約束です」と。地上での長くも勿論ですが、わたしたちは、このエフェソ書を始めから読んで来ました。地上においても、天上においても朽ちることのない永遠の恵み、祝福に与かり、主イエス様のお陰で、天の神様の祝福の相続権者にされているのです。このことをパウロは、本書の最初で証したことであります。そして、それが本当にそうなのだ、そしてそれ以外のことは全て二の次なのです。ですから本当に、現に子供がいるにしても、いないにしても、私たちの為すべきことは、キリストに対する畏れをもって、全ての人に仕えること、そして、キリストのお陰で、こんな恵みを、朽ちない祝福に与っているということ、毎回言わなくてもいいですが、これを常に生きる。それがキリストの恵みに与った者の喜ばしい務めの眼目であります。

◆いずれにせよ、わたしたち各自が今日あるのは、今日までの諸経験の集積です。それを一言で表現するのは至難の事ですが、例えば、本エフェソ書の差出人である使徒パウロは、コリント前書15章10節でこのように言っております。「神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」神様は、その恵みをもって、この世で「最も小さい者」を「最もよく働く者」に変え給うたのです。先週、お話しした時に、パウロのこんな言葉を紹介いたしました。コリント全書11章1節です。「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」普通、「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました」とか、「わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい」などと言う者を、わたしたちは信頼しません。しかし、パウロは、素直にそう言っているのです。反省しないといけないのは、パウロではなくして、私たちの方ではないでしょうか。わたしたちは、「恵みの証人」のレベルを下げているのでしょうか。

◆以前よく礼拝に出席しておられた松井さんや野間さんの事を覚えておられると思います。先日の炊き出しにも来ておられました。あの松井さんの「アーメン」は少し乱暴な口調でしたが、私たちの5人前か10人前のボリュームがありました。わたしたちも、心底から「アーメン」と唱え、自ら「御心の天になる如く、地にも成させ給え」と祈る時、主はこの祈りを必ず叶えて下さる事を信じて、松井さんに負けない真実をもって、「アーメン」と唱えましょう。アーメン」は、ヘブライ語で、「真に」「確かに」「然り」の意味でしたですね。

◆わたしたちは、礼拝と、信仰と、生活と、讃美の質的レベルを上げねばならないと思います。このように申せば、やや律法主義的に聞こえるかもしれませんが、しかしわたしたちの与っている、その桁外れの恵みからすれば、レベルがどののではなくして、身を捧げて、この恵みに応え、この恵みをほめ讃える以外のことはできないのではないのでしょうか。

◆この道を、思いを新たにされて、信仰から信仰への道を、恵みから恵みへの道を、讃美から讃美への道を、感謝から感謝への道を、歩んでまいりましょう。神様は私達一人一人のことを覚えていて下さいます。この主イエス様の父なる神様を信じて裏切られことは決してありません。ですから、私達もこの御方を裏切らないで、心底から感謝して、真実に「アーメン」と唱えつつ、主の恵みの証人としての日々を送りたいと思います。

◆お祈りいたします。

恵みに富み給う主イエス・キリストの父なる神様。

私たちの感激や感動は長く続きません。けれどもあなたの慈しみと真とは崩れる事はありません。常に、永久に変わることなく、私たちをあなたの心に留めて、折に適う救いの御手を差し伸べて下さいます。どうかその事を肝に銘じて、これからの日々を、あなたの恵みの証人として、それぞれの立場で、歩んで行くことができますよう、守り導いて下さい。この祈り、イエス様の御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。